

関西学院セミナーハウス プログラム
開館記念セミナー

昭和53年11月17日

開会の辞 久山 康院 長
講師および通訳の紹介 倉田和四生 社会学部長

講演 (I)
現代社会の危機について

講師 タルコット・パーソンズ
通訳 別府春海教授
司会 萬成 博教授

パネル・ディスカッション

テーマ 現代社会の危機をめぐって

パネラー タルコット・パーソンズ
富永 健一 東京大学文学部教授
新 睦人 奈良女子大学文学部助教授
武藤 一雄 関西学院大学文学部教授
中野 秀一郎 関西学院大学社会学部教授
司会 倉田和四生 関西学院大学社会学部長
通訳 別府春海 スタンフォード大学教授

昭和53年11月18日

講演 (II)
現代社会と宗教

講師 タルコット・パーソンズ
通訳 別府春海教授
司会 北村次一教授

質疑応答

講師 タルコット・パーソンズ
通訳 別府春海教授
司会 佐藤 明教授

司会 萬成教授

ただ今より関西学院千刈セミナーハウス開館記念セミナーを始めさせていただきます。

タルコット・パーソンズ教授を迎えまして、関西地方はもちろん東北・関東方面より多くの研究者のご参加をいただき、主催者として大変光栄に存じております。午後の司会は、社会学部に属しております萬成がさせていただきます。まず、学校法人関西学院理事長・院長であり、本セミナーハウスの館長でもあります久山康先生より開会のあいさつをお願いしたいと思います。

開会の辞 久山院長

本日は、この関西学院の千刈セミナーハウスの開館記念セミナーのため全国より多くの方々がお集まりいただきましてありがとうございます。このセミナーハウスは、案内のパンフレットにも書きまされたように関西学院の新しい教育理想の実現のために創設したものでございます。ここは都会に近い所でございますが、それにもかかわらず都会の騒音から全く離れ、清らかな山々に囲まれております。この大自然のただ中で魂を休め、人間の根本のあり方を考える場所を開きたいというのが、このセミナーハウスをつくりました根本の理由でございます。関西学院はご承知のようにキリスト教主義の学校でございますが、来年は90周年を迎えますが、今日私達が最も宗教に接しやすい場所は、大自然においてではないかと私は思っております。この自然と人間との関係は日本の伝統のなかでも仏教その他を通してはぐくまれてきていることでございます。私達が道元、芭蕉、良寛、漱石などのことを考えます時に、そのことはすぐに分るのでございます。キリスト教でも聖書の中に「野の百合空の鳥をみよ」というイエスの言葉がございます。自然を通して自然の本源である神に接するということがそこにはあるわけでございます。もちろんキリスト教はそれできまるわけではございませんけれども、宗教に関係の薄くなつた現代人には、静かな自然の中で魂を養うことがまず必要だと考えているわけでございます。そういう基本的な理念の下で、このセミナーハウスは、学生のゼミナールのために、また先生方の学問研

究、あるいは学会のために使っていただくこと、それからさらに同窓、父兄、地域の方の生涯教育の場として使っていただくこと、そして最後に新しい世界的な時代が始まろうとしております今日、これを国際交流の場として使うこと、この四つの事柄がこのセミナーハウス建設の根本的な目的でございます。今日は、そのセミナーハウスの開所の記念講演といたしましてパーソンズ先生をお迎えすることができました。もちろん私が、パーソンズ先生のことをご紹介申すまでもなく、みなさんはよくご承知のことでございますけれども、ハーバード大学の名誉教授として社会学の分野で世界的な権威をもっていらっしゃる先生を、はるばるここにおいでいただきまして、開館記念のゼミナールをもつことのできますことは私達の大きな喜びであり、深い感激でもございます。またパネル・ディスカッションの講師として東京大学の富永先生、奈良女子大の新^{あたら}先生、又学院の武藤先生、中野先生に御参加頂きましたことも、私たちの大きな感謝でございます。どうぞこの新しいセミナーハウスで、パーソンズ先生を囲みまして2日間、充分私達が学ぶことのできますように願ひまして私のあいさつを終らせていただきます。

司会 萬成教授

次にタルコット・パーソンズ教授を関西学院大学に迎え、記念セミナーを推進され、又関西学院大学大学院におけるセミナーを企画いたしました倉田学部長よりパーソンズ教授及び本日の通訳の労をとっていただきます。別府春海教授の御紹介をお願いしたいと思います。

講師および通訳の紹介 倉田社会学部長

それでは本日おむかえいたしました、タルコット・パーソンズ先生及び通訳の別府先生について簡単なご紹介をいたします。

このセミナーにご参加の方はパーソンズ先生についてはご承知のことと思っておりますけれども念のためごく簡単にご紹介いたします。先生は1902年、アメリカ合衆国のコロラド州にお生まれになりました。お父さんは Congrigo 社のミッシヨ

ナリーであったそうで、国内伝導の地コロラド州で先生は生れになったわけでございます。お父さまは、その後プロフェッサーになられて、後には大学長をなさった方でございます。先生はコロラドの地からマサチューセッツのアーモスト・カレッジへ進まれました。先生にどうしてコロラドからはるばるアーモストまで来られたのかとその理由をたずねましたところ、それは家族の伝統であると答えられました。パーソンズ家に生まれた人は、みなさんアーモスト・カレッジへ進まれるということになっていたんだそうでございます。

そういうわけでアーモスト・カレッジにお入りになりまして、1年生、2年生の間は、生物学あるいは医学について勉強されて、後には医師になる気持であったようでございますけれども、3年生、4年生と次第に社会科学、特に経済学に関心を向けられるようになりました。

アーモスト・カレッジを卒業されました後、すぐにロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティクスに留学され、そこでホブハウスであるとかマリノスキーであるとかいう方々について勉強なさったようでございます。

その後、さらにドイツに渡られまして、ハイデルベルグ大学に入学し、ウェーバーがなくなった数年後にハイデルベルグで勉強され、そこで学位をおとりになったわけでございます。

その後ただちにアーモスト・カレッジで1年間、経済学のインストラクターをいたしました後、ハーバード大学の経済学のインストラクターにおなりになりました。それから45年ばかりハーバード大学で研究と教育に専念されたわけでございますが、1972年に定年退官されてハーバード大学の名誉教授におなりになったわけでございます。

その間、東部社会学会長(1941年)、それからアメリカ社会学会の会長(1949年)をなさっておられます。理論社会学界においては、アメリカの最長老の先生であることはみなさんご承知の通りでございます。

先生の業績についてもよく知られておりますけれども、1937年にお書きになりました「The Structure of Social Action」という書物は、先生がヨーロッパの社会理論、マーシャル、マックス・ウェーバー、それからデュルケーム、パレートな

どのすぐれた社会理論を総合して、独自のいわゆる「ボランタリイスティック・セオリー・オブ・アクション」という理論体系をおつくりになったことで有名でございます。

その後、1951年に『行為の一般理論』および『社会体系論』という書物をおかきになり、行為の一般理論といわれるシステム論というものを新たに創造され、これが今日全世界の社会学界に大きな衝撃を与えているところは論をまたない所でございます。さらに先生の理論体系は、会社システムだけに関しましても、経済と社会との連関、パーソナリティと社会との関係、政治と社会との関係というふうに、展開して参りまして、今年度もつい先日、11月にはいってからアクション・セオリー・アンド・ヒューマン・コンディションという非常に膨大な著書を刊行されたばかりでございます。

そういう点から申しましておそらく今世紀に現われた社会学者の中で、ウェーバーだとかデュルケームだとかいう人達の持つ理論的な高みにまで到達された、かず少ない社会学者の1人であると私は考えております。

それから別府先生について簡単にご紹介いたしますと、先生はアメリカのロスアンゼルスで生まれ、6才のとき来日されて、小学校、中学校を卒業し、さらに旧制の高等学校に在学なさったのち、戦後アメリカに帰国され、それからずっとアメリカにいらっしゃるわけでございますけれども、現在は、スタンフォード大学の正教授でございます。専攻は文化人類学で、現在は日本研究のために、フルブライトによる研究員としておみえになっておられまして、国立民族学博物館および関西学院大学社会学部で教べんをとるとともに、研究をなさっていらっしゃる方でございます。この度のセミナーに関しましては、特にお願ひいたしまして、すべて先生に通訳をお願いすることにいたしました。以上をもって私の紹介を終ります。